

平成21年5月25日現在

研究種目：若手研究（A）

研究期間：2006～2008

課題番号：18682003

研究課題名（和文） 前方後円墳築造周縁域における境界領域の構造に関する研究

研究課題名（英文） Studies on the structure of boundary region in the periphery region of the keyhole-shaped mound construction

研究代表者

橋本 達也（HASHIMOTO TATSUYA）

鹿児島大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号：20274269

研究成果の概要： 古墳築造南限域における前方後円墳の実体解明を目指し、古墳時代社会の境界領域の地域特性と地域間交流の様態から国家形成期における領域構造の解明を目指した。本研究によって鹿児島県神領10号墳の発掘調査を実施し、埋葬施設・副葬品・墳丘構造に関わる多くの情報が得られ、きわめて多様な地域間交流を行う境界領域の実態を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2004年度			
2005年度			
2006年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2007年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・古墳時代・前方後円墳・発掘調査・周縁域

## 1. 研究開始当初の背景

従来、南限域の古墳時代研究においては熊襲・隼人の存在を前提とすることが広く行われた。しかし、しかしそれは7世紀後半以降の九州南部観を反映したものであって、そもそも古墳時代墓制から如何に民族を抽出し得るのかといった本質的な問題は十分に検討されてこなかった。

九州南部では前方後円墳などの古墳と地域に独自の墓制が共存し、副葬品にも多くの共通性がみられる。一方のみを異民族として捉えることは適切でない。この実態を正しく評価し、古墳時代墓制から社会構造を解明するには、発掘調査資料による比較研究が不可欠であった。

九州南部の在り地墓制である地下式横穴墓に関してはすでに1000基に及ぶ調査事例がある。しかしながら、前方後円墳の実態はいまだ不明確で、とくに最南端の古墳築造地域、鹿児島県大隅地域での前方後円墳の実態はまったく未解明であった。

そのため、まず大隅地域における前方後円墳の発掘調査が必要であった。

また、すでに調査が行われ、部分的に資料が確認されていながらも十分な情報が公表されていない事例などもあり、その再検討も必要であった。

さらに、九州南部の古墳時代社会を理解するためには、中央としての近畿古墳時代社会や東北、四国、あるいは韓国三国時代など他

の地域との比較が必要であるが、これまで九州南部の古墳時代研究はローカルなものとして捉えられるのみで、同時代史のなかでの相対化の視点を欠いていた。

## 2. 研究の目的

九州南部、古墳築造南限域において前方後円墳の実態を発掘調査によって実証的に解明することを第一の目的とした。

その具体的な資料をもとに、古墳時代の地域個性と地域間関係の様態を検討し、文献に寄り掛かった熊襲・隼人論を脱却し、古墳時代の地域間関係において、周縁領域の構造を考察し、単なるローカルなものという視点の克服を目指した。

また、九州南部の古墳時代社会を列島各地域あるいは朝鮮半島・中国の同時代社会との比較の上で、その特質を再検討し、その上で新たな古代国家論の基盤構築を目指すこととした。

## 3. 研究の方法

(1) 南限域の前方後円墳の情報の獲得にむけて発掘調査を行った。発掘調査は全国から古墳時代の考古学的研究に関心を持つ大学院生・大学生を集め、毎年夏季の大学休業期間を利用して実施した。

調査対象は、いくつかの候補から鹿児島県大崎町神領 10 号墳とした。それには以下のような理由がある。

① 神領古墳群には、5 世紀前半の九州最大規模の横瀬古墳が近在しているが、この横瀬古墳自体は古墳群を形成していないことから、神領古墳群がその出現系譜になんらかの関連をもつのではないかと考えられたこと。

② 神領古墳群は前方後円墳 4 基を含む古墳群でありながら、従来まったく古墳に関する情報がなく、この古墳群の時期等も不明であったため、新たな情報を得られる可能性が高く、その一端だけでも明らかにできれば、新たな九州南部の古墳時代像を描く素材になると考えられたこと。

③ 神領 10 号墳は神領古墳群の中では最も大きい前方後円墳と考えられたため、形態・規模などの基本情報だけでも明らかになればおおよそ神領古墳群の意義が理解できると考えられたこと。

このように、この古墳の発掘調査が南限の古墳時代社会の研究資料として一定の役割を果たしうると考え、まず、墳形・規模の確認のための調査を第 1 次調査で行い、第 2 次調査では第 1 次調査でとくに遺物の集中することが確認されたクビレ部の調査を重点的に行い、第 3 次調査で古墳の中心施設である埋葬施設の調査を重点的に行った。

実施にあたっては、地元・大崎町教育委員

会の協力を得た。

(2) すでに、地元自治体等の機関によって調査が行われ、出土している資料の再検討を実施した。とくに実測・写真当の基本情報の揃っていないものはあらためて記録を作成した。

資料は大隅地域の前方後円墳等の古墳資料のほか、地下式横穴墓出土資料などのほか、都城を中心とする宮崎県西部地域の地下式横穴墓資料、薩摩地域の古墳や土壇墓等の各種古墳時代墓制出土資料である。

(3) 九州南部の古墳時代社会の特質を他地域の様相と比較検討した。とくに既刊の報告書等を収集し、また実際に比較資料の調査を行った。

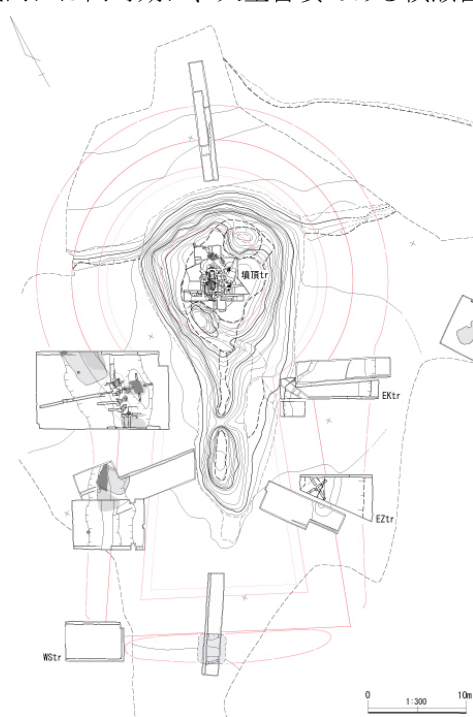
とくに古墳築造の周縁域、外部社会の接触域、外部社会である東北地方、韓国三国時代、中国遼寧地方の資料との比較の上に、古墳時代墓制の特質とその地域様相のあり方について検討した。

## 4. 研究成果

(1) 神領 10 号墳の発掘調査を行い、以下のように、発掘調査によって多彩な出土資料を得ることができ、古墳築造南限域の前方後円墳の実態をきわめて明確にすることができた。

### ① 墳形・墳丘規模、時期

発掘調査の結果、神領 10 号墳は墳丘長約 55m の前方後円墳であることが確定した。また、同時に調査で出土した土器から 5 世紀前半に位置づけられることが判明した。同一地域内には同時期に、大型古墳である横瀬古墳、



約 20m の円墳である岡崎 18 号墳、墳丘をもたない下堀地下式横穴墓群などが確認されており、この古墳が横瀬古墳に次ぐ階層にあった人物を葬ったことを想定することができ、大型古墳の被葬者を頂点とする階層構造が解明できた。

## ② 初期人物埴輪・初期須恵器



墳丘の調査にもなつて、埴輪や須恵器が出土し、地域間交流にかかわるきわめて重要な資料を得た。

埴輪の中には 1 点、盾持ち人埴輪が出土した。神領 10 号墳の時期である 5 世紀前半は人物埴輪の出現期であり、全国的にも人物埴輪はきわめて少ない段階である。しかも、東日本には盛行するが、西日本において人物埴輪は数少ない。時期および地域としてきわめて稀少な資料である。これは近畿中央部との技術交流なしには出現しないものと考えられる。

また顔面の表現が埴輪としては異例なほどきわめてリアルで造形史的にも重要であることが彫刻家（中村晋也氏ら）からも指摘



されている。

墳丘クビレ部では、須恵器と土師器を大量に伴った祭祀空間を発見した。この土器群はほぼ祭祀終了時の状態をとどめた良好な状態で確認された。須恵器は朝鮮半島陶質土器の影響をまだ残した段階の初期須恵器であり、小型器種から大型の甕までさまざま器種を取りそろえ、個体数で 35 個体確認された。

この数は、大阪府古市古墳群中の野中古墳に次ぐ全国 2 番目の多さである。土師器を含めると 71 個体の土器が確認されており、傑出した質と量を誇る。

須恵器の多くが、愛媛県市場南組窯で生産されたと想定されるもので、豊後水道を挟む地域間交流においても重要な資料である。また、その須恵器の出自が加耶地域にあることも明確にできる資料である。

## ③ 舟形石棺・甲冑などの鉄製品

後円部墳頂での調査によって、埋葬施設には刳拔式舟形石棺であることが判明した。

大隅地域では本来、刳拔式石棺は製作しておらず、形態的特徴から延岡地域の技術系譜にあることが判明した。

また、大部分が盗掘によって攪乱されていたが、その盗掘坑を中心に副葬品が出土した。鉄製甲冑、鉄鏃などの武装具を中心とするが、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉等も出土している。

これらはいずれも、在地で生産されるものではなく、とくに武装具は近畿の中央政権から配布されるものだと考えられている。近畿中央政権を結ぶ広域交流を考察する上での重要資料である。

出土した資料はその多くが広域にわたる地域間交流を想定させるものであり、九州南部の地域においてもきわめて多様な情報が各地からもたらされていたことを確認し、古墳築造の周縁地域が単なるローカルなものではないことを明確にした。

(2) 既存の古墳出土資料の情報化もあらためて充実させ、研究報告などを刊行している。

資料は地域間交流において重要な指標となる鉄製品・須恵器・埴輪を中心に行った。

また、九州南部の古墳時代資料とともに、各地域の古墳時代にありながら古墳ではない墓制の出土資料などとの比較を行っている。

## (3) 比較

韓国陶質土器や鉄製品などの資料調査を行い、その成果を研究発表等に活かしている。とくに神領 10 号墳でも出土した鉄製甲冑は、日本列島の広域にわたって出土し、また韓国でも出土するため、古墳時代社会を広域横断的に研究する上で重要な資料である。そのため重点的な調査を行い、その比較検討を行っ



ている。

この研究によって得た情報はさらに発展させて行く余地があり、研究期間は終了しても今後さらに論文として発展させていくことが可能であり、その予定である。

#### (4) 公開

この研究を通して得られた成果、あるいは情報の開示を適宜行ってきた。

① 代表者・橋本達也は博物館所属であるという点を活かして展示公開を行っている。

2006年には、鹿児島大学総合研究博物館特別展「発掘！鹿児島古墳時代」として、神領10号墳をはじめ、九州南部の古墳時代資料を用いた展覧会を実施した。また、発掘調査の方法や発掘調査に関連する技術の展示も行っている。

② 大隅地域の肝付町教育委員会と共催で肝付町歴史民俗資料館特別展「古墳に眠る肝属の王」を開催した。大隅地域では専門学芸員のいる博物館はなく、これまで特別展などの企画が行われたことはなかった。ここでも、橋本が関係した出土資料や肝付町所蔵の資料等を用いて展示会を行い、この地域の古墳の重要性を広く訴えた。

③ 3年間に渡った神領10号墳の発掘調査では必ず現地説明会を実施し、調査状況の公開を行った。人口の少ない地域でありながら、毎回150人以上の参加者があり、大崎町含め周辺でも古墳研究の理解を広める上で大いに意義があった。

④ その他、大隅地域や薩摩地域で公開講座等の講演を行いその成果報告と情報公開を進めている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計9件)

1. 橋本達也 日本考古学会第64回例会「鹿児島県神領10号墳の発掘調査－舟形石棺・甲冑・初期須恵器・盾持人埴輪が出土した南限域の前方後円墳－」2009.3.14 東京国立博物館

2. 橋本達也 第11回九州前方後円墳研究会「九州における古墳時代後期の甲冑と鉄鏃」2008.5.31 佐賀大学

3. 橋本達也 日本考古学会第74回総会「古墳築造南限域の初期人物埴輪と初期須恵器」2008.5.25 東海大学

4. 橋本達也 第10回九州前方後円墳研究会「九州の中期甲冑」2007.6.9 宮崎県立西都原考古博物館

5. 橋本達也 第8回古代武器研究会「九州における甲冑出土古墳の動態」2007.1.13 滋賀県立大学

6. 橋本達也 国立歴史民俗博物館国際研究集会「甲冑編年研究の日韓比較－帯金式甲冑を中心として－」2006.11.25 国立歴史民俗博物館

7. 橋本達也 第7回七隈史学会大会「古墳時代甲冑研究の現状と課題」2006.10.1 福岡大学

8. 橋本達也 第9回九州前方後円墳研究会「九州における古墳時代前期の鉄製品」2006.6.17 別府大学

9. 橋本達也 日本考古学協会第72回総会「列島西南端の古墳と地域間交流」2006.5.28 東京学芸大学

[図書] (計3件)

1. 橋本達也 『薩摩加世田 奥山古墳の研究』2009 鹿児島大学総合研究博物館 133pp.

2. 橋本達也 『大隅串良 岡崎古墳群の研究』2008 鹿児島大学総合研究博物館 370pp.

3. 橋本達也 『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』2007 鹿児島大学総合研究博物館 88pp.

[その他]

1. 橋本達也 「神領10号墳発掘調査3－大隅のフィールド調査－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』No.22 2009.3 pp.1-10

2. 橋本達也 「神領10号墳発掘調査2－大隅のフィールド調査－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』No.19 2008.3 pp.1-10

3. 橋本達也 「古墳に眠る肝属の王－塚崎古墳群の時代－」鹿児島大学総合研究博物館・肝付町教育委員会 2007.7 pp1-4

4. 橋本達也 「神領10号墳発掘調査－大隅のフィールド調査－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』No.15 2007.3 pp.1-10

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 達也 (HASHIMOTO TATSUYA)  
鹿児島大学・総合研究博物館・准教授  
研究者番号：20274269

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし